

まなれ歴史通信

第61号
2011.12.1

肥後和男氏寄贈資料について

生瀬出身の民俗学・古代史の学者である肥後和男所蔵の図書類が茨城県立歴史館に寄贈、平成十四年九月十二日に搬入された。現在、歴史館に架蔵されており、箱数で二三七箱、総数は一万三三九〇点である。

肥後和男について、門下生の文学博士芳賀幸四郎は墓誌に次のような撰文を寄せている。

「先生は肥後巳之介、いし夫妻の長男として明治三十二年四月八日茨城県久慈郡生瀬村小生瀬に誕生、幼少より穎悟、茨城県立下妻中学校を経て東京高等師範学校に入学し、大正十年同校を卒業、福岡、長野県に於て教職に就いたが、同十三年京都帝國大学文学部史学科に進学、さらに同大学院に於て研鑽を積んだ。大津京跡の研究等に従事して顕著な成果を挙げ、昭和七年十八年教授に昇格した。其の間、民俗学を導入して日本古代史の研究に新生面を拓き『宮座の研究』によつて文学博士の学位を受け、思想史、文化史等の領域に独創性の豊かな業績を挙げ、且つ多くの門下生を鍛成して学界の雄として畏敬された。

昭和二十九年九月公職追放令により、一時野に下つたが、同

二十七年復職して東京教大学教授となり、同三十八年定年退職した。其の後、立正大学、日本大学の講師また教授として活躍したが昭和五十六年二月二十四日逝去した、享年八十二歳。先生は事学問に関しては実に峻厳であったが、他面、教育的温情に富み、且つ古美術の鑑賞に一家の見識を持ち、また和歌、茶の湯、俗曲等をたしなむ風流人であり、まことに卓抜な学者であるとともに偉大な人間の教師でもあった。」

肥後は、ふるさと大子に関しても数多くの足跡を残している。昭和四十年六月三十日発行の「茨城県史研究」第2号に「生瀬乱のこと」を掲載している。「この乱の年代については、慶長七年、同十四、元和三年、同七年という四説があつたことになる。この中、元和説はどうも怪しいようで…慶長十四年といふのも十分の証拠もないようである」と述べている。

昭和四十七年六月二十四日、第一回町史編さん委員会が開催された。肥後は、委員会顧問の立場で、「大子町の歴史と古文書」(町史研究第一号に「大子町の歴史」掲載)の講演をする。教員の蛭川吉男は「大子史料」創刊号で、「私たち『大子歴史研究会』は、肥後英三氏のお骨折りで、肥後和男先生を囲んで、先生の帰郷されるたびに会合を開いてきた。たまたま明治百年を記念して機関誌を発刊してはという声が起り」、昭和四十七年三月十日に創刊号を刊行する。肥後は、この創刊号に「生瀬と烈公」「生瀬乱のこと」を、第一号には、「藤田東湖と大子」「桜岡源次衛門」を掲載している。

肥後和男寄贈資料は、書籍、雑誌、原稿、著作集、スクラップ、パンフレット、研究ノート、日記、和書類など多種類ある。これらは、肥後の「ふるさとに対する思い」がたくさん含まれた資料であり、これらを大子町で展示、解説する場がつくればいいであろうか。

(野内)

大藤嘉右衛門のこと

大子郷土史の会 野 内 泰 子

大子町小生瀬の大藤家は私の生家であり、その昔、祖母や伯父から小生瀬へ居を移した経緯や生瀬乱について何度も聞かされていて。勿論、祖母や伯父達も同じように聞かされて育つて来たのである。当時、私は、こうした話をおとぎ話の一つのような感覚で聞いていた。しかし、それは、何時とはなく身体に刻み込まれていたようだ。

さて、大藤嘉右衛門だが、（嘉右衛門としているものも）名は大藤嘉右衛門多聞（宗園としているものも）正保四年亥（一六四七）没。生瀬乱が起つたのが慶長七年（一六〇二）とすると、亡くなる四十五年前のことだから、当時二十代後半か三十歳位ではなかつたかと推測される。生憎生年が不詳の為あくまで推測の域を出ないが、当時としてはかなり長命で氣力、体力共に汪溢した人だつたのだろう。記録がないというよりは、見事なまでに事實を消し去つてしまつた感のある事件前後の事については、殆ど伝聞として地元に残り、長く語り継がれてきたもので、私も祖母から生瀬乱に絡めて時折、話を聞いていた。

ここで、祖母について触れておくと、名は大藤たつ（多津とも書いた）旧姓肥後、万延元年（一八六〇）五月九日生まれ、没年は、昭和二十一年四月十一日、八十六歳であつた。旧姓からも分かる通り実家は肥後家。肥後六左衛門の娘、つまり隣から嫁いで來たのである。八人の子をもうけたが、夫嘉恭千松が長く病床にあつたこともあり、大きな家を支えるのはさぞ大変だつたろうが、氣丈でいつも背筋を伸ばし毅然とした人であつたように思う。とは言つても、祖母は私が十三歳の時に亡くな

つたし、一緒に住んだのも一年と少し位、その僅かの間に囲炉裏端などで昔話を聞かせてくれた。今から六十数年も前の大昔のことだ。

前置きが長くなつた。本題の大藤嘉右衛門のことについては、生瀬乱を抜きにしては語れない。ここで生瀬乱と言われている事件について、私見ではあるが乱というには当たらぬのではないかと思つてゐる。かと言つて一揆というものでもない。騒乱と言えば確かにその通りではあるが。

ところで、この出来事から見ると大藤嘉右衛門は関係がない。部外者である。では何故生瀬乱というと嘉右衛門の名が出て来るのか。それは、事件後その様子を視察するためにやつて來た検使の役人を案内した人物として、又、小生瀬村の立て直しという大きな役割を水戸藩から命ぜられ再建を果した人物として欠かせないからである。

一口に大藤嘉右衛門というが、同名の人物は六・七人いる。ここで言う嘉右衛門は、小生瀬に本拠を移して大庄屋を務めた初代の嘉右衛門多聞であり、大藤家としては八代目である。生瀬乱が起きた年については諸説あるが、いずれも後年、地元の人々から聞き取つて記録したものである。慶長七年説をとると、領主は武田信吉（徳川万千代）であり、十四年説をとると藩主は徳川頼房（水戸藩初代）である。武田信吉は慶長七年十一月拌領と言うことなので、十月十日（九日とも）に起きたとされる生瀬乱の時はまだ領主になつていない。慶長七年五月に佐竹義宣が秋田に移り、同年十一月に領主が交代するまでの約半年という空白の時間について、年貢を騙し取るという大それたことが行われたのではないか。このことが、一村皆殺しという大事件になるとは考えもしなかつたの

だろうが。

大藤嘉右衛門は、当時大子村で大庄屋をしていた。もとは佐竹の家臣でもあつたが、佐竹氏が秋田へ移封されてしまつたので武士の身分を捨て、保内郷の大庄屋を務めていた。生瀬乱のあと、水戸藩から来た役人の案内をして、惨憺たる有様の小生瀬を見たのである。

十月十日の餅つきをしていた村人は、役人に追われ高柴村の岡之内の沢に逃げ込んだ。しかし、そこは高い崖に囲まれた行き止まりで、逃げ場を失つた村人は皆殺しにされてしまった。それで、その辺りを地獄沢と言つてゐる。祖母は生前そこへ行くと、人々のうめき声が聞こえたり、胸がしめつけられるような気持ちになつたりするから、決して近寄つてはいけないと言つていた。又、沢へ逃げ込むとき、役人に命乞いをして助けられた人も何人かいて、そこは嘆願沢と呼んでいることや、近くには首塚、胴塚という地名もあり、それぞれ首や胴を埋めた所だという。子ども心中にもそんな話の度に恐ろしさを感じたものである。この事件の後始末は大藤嘉右衛門が行つたが、その後水戸藩から命じられて本拠を小生瀬村に移して、そこで大庄屋を務めることになり、現在住んでいる小生瀬に移つて來たのである。生瀬乱のあと数年経つてからのことらしい。

もともと小生瀬の地は田どころで、良質の米が穫れたらしく水戸藩としてもこの地を荒らしてしまうこと大きな損失であつたようだ。だから、嘉右衛門に早急に復旧するよう命じたのではないか。そうはいつても大変な難事業であったようで、大子に住んでいた時に仕えていた人達は勿論、近隣の百姓達を招致して復旧に当たつたという。そして、その百年後には、石高千六百石以上となつたとこれは記録もある。一時、人口ゼロとなつてしまつた村が戸数百四十九戸にまで増え、隣村の袋田、

高柴、大子などの石高の実に二倍以上の大きな村に生まれ変わつたという。こうなるまでの嘉右衛門や後を継いだその後の指導者達の労苦は如何ばかりであつただろうか。

以上のことは、祖母が折にふれ少しづつくり返し、くり返し話してくれたことだが、祖母の他にも同じように昔のこと話をしてくれたひとがいた。それは伯父の大藤幸太郎である。

伯父は嫡男でありながら家を弟の哲男（私の父）に継がせた。古武士のような風格を持つた人であつたが、昭和三十九年に亡くなつた。私は学校に通う為、この伯父の家で五年以上も世話をなつたので、その間にこのようなことを幾度となく聞かされた。私はその都度正座をして手を膝の上に置き、真つ直ぐに伯父の顔を見て話を聞いたのである。

祖母は、小生瀬地区では餅をついた後、すぐに臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。それは、臼や杵を洗つてはいけないのだと言つた。私はその都度正座をして手を膝の上に置き、真つ直ぐに伯父の顔を見て話を聞いたのである。

前に大藤嘉右衛門は何人もいたと書いたが、家系図を見ると代々嘉右衛門を襲名するのが習わしだつたようである。嘉右衛門ではないが名前に「嘉」の字を遺つてゐる人も多い。以上、とりとめもないことを書いたが、祖母から聞いた話の他に茨城県農業史編さん会『小生瀬村滅亡史』、肥後和男「生瀬乱のこと』『茨城県史研究第2号』なども参考にさせていた

生きた証・私の抑留生活（六）

～抑留生活の回顧～

全国強制抑留者協会茨城県支部長

須藤富之助

我が家を去つてから四年間有余か月、役場前において見送りの人たちに対し、「須藤富之助、立派にやつて参ります」と、決意を新たに出発していった一人の男は、今ここに国体を晒したのである。何ともやりきれない思いをどうすることもできなかつた。聖戦に躍らせられて、一途に祖国日本の為、同胞の為にはと、この第二次世界大戦に参加したというよりは、我々の時はすでに決定的な段階に入つていた。

日ソ不可侵条約の締結によつて紳士的に履行されるはずであるにもかかわらず、終戦直前になつて条約を無視し、宣戦布告し、満州、朝鮮、樺太に進駐し、思いのままの略奪を行い、幾十万の抑留者に強要して苛酷な重労役に服させたソ連の行為は人道的に許すことができない。異國の地にて日本、そして郷里、兄弟姉妹、知人を偲びながら、力尽きて最果ての地に散つていつた、死ぬにも死にきれない思いを残した同胞の為にも、恨みは骨髄であり、到底許せるものではない。数万の犠牲者の為にも断固として、子々孫々に伝えておかなければならぬ。

ソ連邦の国の体質、国民性、そんなことも重大なる要素としてみるべきだろう。ソ連のように火事場泥棒的な振る舞いをした国はほかにあるのだろうか。ソ連以外の国々の終戦後の抑留者は、ソ連の国のごとき扱いは一人として受けていなかつたのである。私どもは終生忘ることはできない。どうして自分はあるの抑留生活の中で、生き抜くことができ

たのか…。つぶさに考えて見るのであるが、まず若さではなかつたろうか。二十二歳から二十五歳という年齢であり、年配の召集兵たちとは体力的にも違つていたし、同じ仕事の場合だったら有利であつたし、マイペースでことを運んだことである。無理をした者の体力消耗は大きいのである。それで早く体力がなくなつてしまふ。

ウクライナ抑留生活で感じたことは、「ゲルマンスキイ」の徹底的な抵抗である。強要されてもそれに応ずることはなく、座り込んで働かない。脅されても、床尾板で突かれても泰然自若としているのである。彼らは誰もが一致してやるからソ連兵も往生してしまうのである。日本人とは違つた一面があるのである。彼らのペースに乗せられると大変なことになる。

我々抑留者は、何といつても戦争の悲劇、その犠牲者には違いない。そして抑留者には何らの補償もされていない。あの生死をさまよつてきた者にという思いはある。しかし、戦争の犠牲者に限つたことではない。誰もがその運命にさらされたという。本当にその通りだと思う。各々の人がその立場、環境にて言い分けもつてゐるし、憤懣^{憤まん}やるかたない思いである。私はこの体験は貴重などの表現では言い表すことのできないことである。

三年が十年、あるいはもつと長い年限の肉体的精神的なダメージを受けたと思つてゐる。「災いを転じて福と為す」の警えのとおり、長い人生の中で生かしていくなければならないと思うのである。私は憧れて軍隊生活に入つて、また、抑留生活の中で徹頭徹尾叩き込まれたようと思う。全く我を通すことはできないし、無視されっぱなしであつた。そんな中で人間としての教訓が馴染んできたと思うし、幸運にも生を得て現在あることを、無上の喜びとしなければならない。（終わり）

観光の振興から豊かな人生を

大子町企画観光課長補佐 深谷雄一

大子町は、日本三名瀑で知られる「袋田の滝」を中心として観光振興に取り組んできたが、現代における観光客は、その時々の話題性や新しい体験、食文化等、多様なニーズを持ち、観光地はそれに応えられる変革が必要になつてきている。このような状況を的確に把握し、新たな戦略での観光地づくりが求められている。大子町には自然や特産品など素晴らしい観光資源が豊富にある。その中から、袋田の滝に並ぶ観光資源を見出し、新たな観光大子としてのブランドを創つていくことが重要である。

現在の大子町の現状について、袋田の滝の入場者から見てみると、平成二十年九月に袋田の滝新観瀑台がオープンし、袋田の滝入場者は八十八万を超えて、前年比二十四万人増加した。しかし、平成二十一年度六万人減少、更に平成二十二年度は十五万人減少し、六十七万となつた。また、今年は三月十一日の東日本大震災による風評被害もあり、現在の入場者は前年比の半分にも満たない状況である。

しかし、旧上岡小学校は、NHK朝の連続テレビ小説「おひさま」の影響で、毎日多くのお客様で賑わっている。七月中旬から特別開放し、十一月中旬までに三五、七二七人のお客様が訪れ、一日平均三三二一人の方々に全国から来ていただいている。永源寺（もみじ寺）においても、昨年テレビ放送され、紅葉を見物されるお客様が殺到し、町中は大渋滞になつた。今年も、多くのお客様にお出でいただいている。これらは、テレビ放送の影響が非常に大きいが、ただそれだけの理由ではないと感じる。昔懐かしい哀愁が漂う木造校舎、季節を彩るその時だけ

の風景など、ここに現代の観光のポイントがあるようと思われる。

また、男体山のハイキング愛好者が増えている。山ガールブルームでの影響もあり、ファッショニ性豊かな出で立ちで、さつそうと山を登る姿は、見ていても清々しい。今年、初めての試みで、西金駅から男体山、月居山を経由し袋田の滝までの縦走トレッキング大会を開催した。全長十四キロ弱の健脚コースではあつたが、一〇八人参加して九十九人完走、ほどほど疲れで最後の階段を下りてきたが、充実し満足した笑顔で帰られた。

大子町には四季を通じ豊かな素晴らしい自然がある。桜田門外の変のロケ地となり、その一つの舞台となつた歴史もある。お茶やこんにゃく、りんごに奥久慈しやもなどの食材も豊富にありその加工品も多い。温泉にりんごを浮かべる特色もある。今の時代は、個々を尊重し、一人一人に語りかけていく時代である。このような豊富な資源を如何に紹介し、知つていただき、惚れていたくかは、私たち一人一人の町民にかかつていてと思われる。私たちが大子町の魅力を良く知つて、そして深く理解し、その魅力をお客さんへ伝えていくことが大切であると感じている。

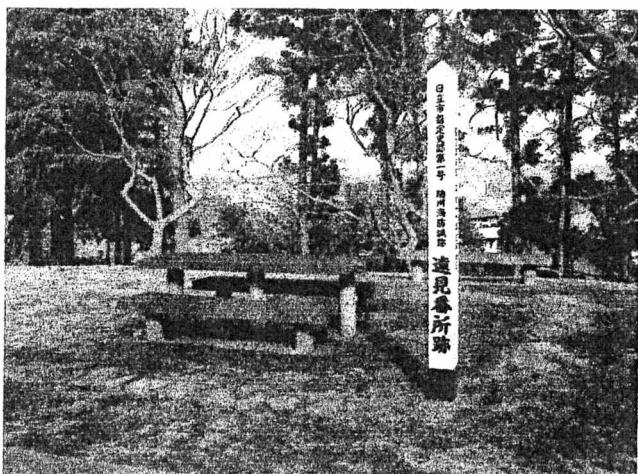
そのような心構えと取り組みが共感を呼び、大子町のリピーターを呼び込んで來るのではないだろうか。また、私たち一人一人も、それによって豊かさを得、充実した人生になるのではないかだろうか。



袋田の滝キャラクター

「ふるさと歴史講座 現地巡り」に参加して

石井 邦朋



県指定史跡 助川海防城跡（遠見番所跡）

十月十五日（土）の小雨の中、町生涯学習課主催の表記の現地巡りに参加した。三十一名の受講生と小澤園彦先生、齋藤典生先生、野内正美先生、石井喜志夫先生、事務局の佐川和夫課長、皆川敦史さんで、バスとワゴン車での現地巡りであった。

最初に入四間の御岩神社。古代より信仰の聖地とし、神仏混淆の靈場として有名。水戸藩主の参詣があり、樹齢五百年とされる三本杉や、参道を囲む樹木がうつそうとして、山間僻地の神社として、神秘的な莊厳さを感じさせられた。

次に助川海防城を見学。徳川斉昭が、天保七年、家老山野邊義觀を海防惣司に任じ、大平山に、異国船に備え、海防を目的に建立させた城である。

山野邊氏は、現水戸の弘道館の地に住まわれていたが、家臣二四七人と共に助川入りした。この築城に、大子の小生瀬村、大生瀬村、三ヶ草村、久野瀬村の伐採した巨木を使用したという。当時これらの村は、山野邊氏の領地であつたからだ。

その後、本丸付近は、助川城跡公園として整備され、市民の憩いの場となつていて。本丸跡からながめる太平洋を見る時、わずか、百七・八十年前の人々が、情報の少ない中で、どのような思いで、百里鏡（望遠鏡）を使い、海を看視していたのだろうかと考えてしまう。

外国から開国をせまられ、一方鎖国の継続と変革期にあたる時代、いずれの時にも、互いに反目しあう新旧二つの考え方と行動がある。当人たちは、それぞれ自分たちの言動が正しいと全力を出している。日本の国を守るという点では一致している。後世から見ると、むなしさもある。それが人間の歴史と思う。

最後は、かみね動物園入口南下にある日立郷土博物館の見学。日立の歴史と産業のうつり変わり、庶民の暮らし、まつりにする資料の展示である。

原始、古代、中世から近代の信仰、農民の住まいと暮らし等の大正時代の民家の模型は、なつかしくもあった。

このような郷土資料館、博物館は、大子にも是非建設し、自然、伝説、民話、民具、くらし、歴史、文化を学び、社会づくりの一助としたいと考えるのは、私だけではないと思う。

今を生きる人が、後の人間に何を伝え、何を考えさせるのかをしみじみと思う現地巡りであった。

日立総合病院あたり一帯が三の丸、その上の急な坂道から二の丸、助川小学校の正門付近が大手口、さらに本丸と続く。

三代目の城主義藝（よしつね）の時、水戸藩内の天狗党と諸生の争いに巻き込まれ焼失・落城。二十八年間の短い運命の城であつた。

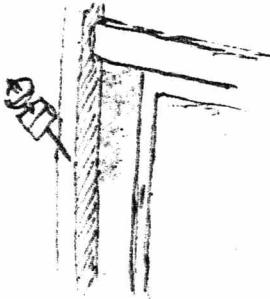
昭和の初め頃の農家の行事 三 二月の行事

一、淡島講（二月三日・八月三日）女性のお祭りで、近所の人が集まって、淡島大明神の掛け軸を掲げてお参りをする。後はご馳走を持ち寄つたり作つたりして賑やかな宴会となる。普段話し合う機会の少ない農家の女性の社交の場であり、農村の習慣などを言い伝える大事な場になる。

二、山の神（二月六日）大抵の地区には近くの山に「山の神」を祭る小さな祠があつて、その日には赤飯やあぶらげなどを上げてくる。山の神は山の安全と収入を祈るので、狐を祭つてあるという。だからあぶらげを上げるのかも知れない。

薄暗くなる頃、「山の神へ上げてこい」と言わされて行つた事がある。家から五、六百メートルもはなれている山の中で、山道からさらによーとメートル程急な階段を上つた林の中にある。辺りは暗くなるし、供え物を上げて拝むのも忘れて帰つてきたことがある。

この山の神はお産の神様で、お産が重いときには空馬を引いて行き、山の神様を乗せて迎えに行くとお産が始まるとか軽く済むと言う話がある。



三、にく豆腐（二月八日）厄払いという意味で行う行事だ。師走八日と二月八日に行う行事だったが、殆ど二月だけになつてしまつた。厄病神が家に入つてこないよう、ニンニクと豆腐を大豆の枝などに差して家や倉などの入り口の所に飾つてお

く。門口には目籠か木の葉籠など目のいっぱいある籠を出しておく。疫病神が来ても目がいっぱいある者がにらんでいるので入れない。目は一体いくつあるのだろうと数えている内に、夜が明けてしまうだろうと言うわけだ。

豆腐とニンニクは栄養もあり体にいい。冬の健康食としても結構理屈に合つてゐる。

四、針供養（二月八日）この日はまた針供養もある。女の人たちが普段使つてゐる針に感謝し供養する日だ。豆腐に針を刺しご馳走を供えてお祭りをする。近くの神様へ行つてお参りしたりする。この日は針は使わない日になつてゐる。

昔は裁縫を習うのは大事な花嫁修業で、大抵の娘さんは近くのお師匠さんの所へ習いに通つた。「お針子」と言つて、お師匠様について裁縫はもちろん礼儀作法まできちんと仕込まれる。主に、農家の忙しくない冬に通うのが普通で一年通してといふ人は少なかつた。

ここで一通りのことは身に付くといふ制度だつた。

謝礼も金銭でといふのは少なかつたようで、お祭りや神事の時に餅とか赤飯などを持っていく位だつたようである。

五、田の神おろし（二月十日）今まで出雲へ行つていた田の神様をお迎えする日だ。神棚には一升瓶に団子を一杯入れてお供えする。



六、節分（豆まき） 略 （石井）

北田気地区の庚申塔

北田気地区にある庚申塔の写真撮影を行つた時のことである。庚申塔を見つめていると、通りかかった中年の女性から「何の写真を撮つてあるのですか」と聞かれ、「庚申塔ですよ」と答えると、「庚申塔って何ですか、何のご利益があるんですか」と尋ねられた。庚申信仰については、それほど忘れられ、過去の遺物になつてきている。庚申塔が建立されている地域は、かつて庚申信仰があつた証である。大子町内の庚申塔は、文字塔の「庚申塔」が多く、「青面金剛塔」と刻銘した文字塔や像容の「庚申塔」となると数える程度しか見当たらない。

左の庚申塔は、北田気地区の国道四六一号沿いの土手に建立されている柱状形の一面六臂像である。風通しのよい木陰に建立されているので像容もよい。建立年代は、享保元年（一七一六）十一月、採録した庚申像塔の中では大子地方で最も古く、県内でも古い方である。



享保元年丙申11月4日建立

庚申塔は、石塔の中央に青面金剛像、上部中央に梵字、上部の左右に月輪、日輪がある。下方の左右には二羽の鶏が刻まれている。六手のうち第三手が合掌し、向かって正面第一手の右に弓、左に矢、第二手の右に蛇、左に剣をもつていて。却下の台座には、左から「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿が刻まれている。鶏については庚申は徹夜行事であり、

「申の日から始まつて酉の日に及ぶ」からとか、「鶏は時を告げるから庚申行事は鶏鳴まで」とか、いろいろと言われていたが、かつて庚申信仰の宿となつた人たちに聞くと、暗くなつてはじまり、夜の十時頃終わりにしていたところもあり、一定ではなかつたようである。

庚申信仰は、諸書によつていろいろな説明がなされているが、簡単に述べると、人間の身体の中には三戸の虫がいて、日夜の別なく人間の行動を監視している。その三戸が庚申の夜になると、人が眠つてゐる間に、身体から抜け出して昇天し、天帝に人間の悪事を報告する。天帝はこれを聞いてその人間の罪惡の程度を判断し、寿命を縮めたりする。庚申塔の見ざる、聞かざる、言わざるの三猿は、自分の身を守ることを表してゐるという。人間の悪事を天帝に報告をする三戸に對して、この三猿のようにしてもらいたいという願望から、三猿を挙むことが考え出されたのであろうと言われている。

庚申（かのえさる）の日は、六十一日目に回つて来るから一年に六回（六庚申）～七回（七庚申）ある。昭和五〇年代ころまでは、まわり番の当屋となつた家は、仏壇やふすまに青面金剛の掛け軸を掛け、線香や団子を供え、合掌したり、拍手したりして挙み、その後飲食を共にしながら語り合うといふ講が見られた。このような庚申信仰行事は日本の経済成長と共に簡略化、形式化され、講は漸次解散を余儀なくされていった。集落（坪）の庚申信仰は、講があつて行われているのが一般的であるが、講が解散されても信仰する人がいると、路傍の庚申像の前に季節の花や果物、酒のワンカツブなどが供えられている場合が見られる。しかし、前述したよな講としての信仰行事は、依上相川地区や上金沢地区を最後に、大子町内から姿を消していった。

（小澤）

新聞記事にみる満州移民の断片（十）

—第九次冷家店大子町開拓団の軌跡—

本誌前号（第六十号）で紹介した記事（昭和十六年七月三日付「いはらき」新聞夕刊）の内容について、もう一点コメントしておきたい。「通信」の欄に「団本部に郵政弁事所（郵便局）あり」との表現があるが、これに関連して『開拓の記録』には次のような記述がみられる。

弁事所とは開拓団本部事務所へ各方面からの連絡を取り扱う中継所の様なもので、例えば県公署の開拓股からの連絡、団本部行の郵便物、新聞等連絡や配達を受ける。そして団本部から来る連絡員に此等を渡す業務をするのであります。

弁事所は、開拓団と外の世界を媒介する、いわば連絡窓口役を担つた部署であり、記事にある開拓団本部のそれとは別に泰安街のなか、それも泰安駅に近い「交通には便利な処」にもう一つ設けられていたようである。「便利な処」にあつたため、「団員や家族が街へ出た折に宿泊出来る」よう部屋と寝具等も用意されていたという。

さて、記事（昭和十六年七月三日付「いはらき」新聞夕刊）に戻ろ。ここには、さらに興味深い記述がある。「冷家店開拓団綱領」、「団訓」、「共同宿舎自粛訓」の三つである。他の開拓団の事例を渉猟したわけではないので明言はできないが、開拓団がどのような考え方や規律のもとで動いていたのかを知るうえで貴重な手がかりになるように思えてならない。

「冷家店開拓団綱領」は、次のように記されている。

吾等団員は天祖の皇謨を奉じ團長中心にして推進し身を満洲開拓の聖業に捧げ神明に誓つて天皇陛下の大御心に

副ひ奉らんことを期す

僅か六〇文字の綱領である。何らかのひな型があつたのかどうか不明だが、「満州開拓の聖業」に身命を賭して取り組み、「天皇陛下の大御心」に応えようとの覚悟が込められているようになれる。しかも、「団長」を中心にして、である。この「団長」については、満州移民政策の根幹をなし、「満州開拓政策の真のあるべき姿を策定した最高の宝典」（満州開拓史）とも言われた「満州開拓政策基本要綱」（昭和十四年十二月策定）のなかで次のように位置づけられている。「開拓地ノ行政經濟機構ニ関シテハ開拓団ガ團長ヲ中心トスル農村協同体タルニ着意シ開拓事業ノ円滑ナル遂行ニ即応スル如ク措置スル：」と。「団長」という地位は重いものであった。

次に、「団訓」を引用しておこう。

- 一、建設は手を握つて団の為めに自己を葬れ
- 二、大地を踏んで物を作り明日への前進を期せ
- 三、人格の完成を期して眞の日本人たれ
- 四、天地の恩に感謝し生きた歴史を残せ
- 五、今日の仕事を明日へ残すな

開拓団を構成する団員誰もが踏まえるべき規律、または心がまえが五項目にわたつて示されている。分かりやすい表現になつていることが印象的である。ただ、前出「満州開拓政策基本要綱」のなかに、例えば「集団及集合開拓農民ノ農業經營ニ関シテハ家族的勤労主義並ニ部落的協同勤労主義ヲ目途トシ」との文言があるが、当時の思潮である協同や勤労の精神を色濃く反映した「団訓」であることもまた確かであろう。

【訂正】本誌第六十号の「三頁、下段の後ろから五行目に「十五年一月」とあるのは「十五年十一月」の誤りです。お詫びして訂正します。

（齋藤）

ふるさと歴史講座現地巡りについて

教育委員会の主催で、十月十五日、郷土に対する理解を深めることを目的に、日立市内の水戸藩二代藩主徳川光圀公・九代藩主斎昭公の地方巡村ゆかりの地を探訪したので紹介したい。

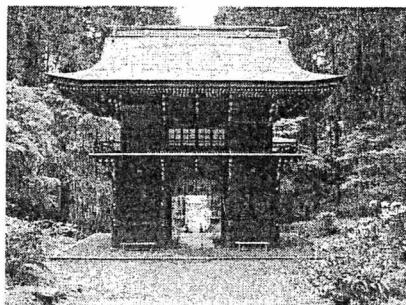
受講生三十一人で、雨天の中の開催となつた。

①御岩神社

御岩山は古くから信仰の山として崇拝され、初代藩主頼房公は出羽三山の湯殿大権現を勧請し、入四間湯殿大権現とした。光圀公が御岩山大権現と改称し、水戸藩の祈願所として、また

神仏混淆の靈場として、厚い信仰を受けてきた。

当日は、年中行事「回向祭（えこうさい）」に当たり、多くの参拝者や露天商があつた。三本杉（県指定天然記念物）、斎（いつき）神社、本殿を見学。木造大日如来坐像（県指定彫刻）や木造阿弥陀如来坐像が特別公開されていた。



神仏混淆の色濃く残る仁王門

研修委員長（茨城キリスト教大学講師）、寒河江邦光文化委員長（山野辺家家老の子孫）の三名が講師を務めた。講義後、センターを昼食会場として借用した。昼食後、海防城に移動し、城跡を散策した。

③日立市郷土博物館

昭和五十年、県内初の市町村立博物館として開館した。常設展では原始から近代に至る日立地方の歴史、近代産業と地域とのかかわり、暮らしの変遷や年中行事・まつり、近現代の美術などについて紹介している。

冒頭、大森学芸員から博物館の概要について、説明を受けた。その後、自由見学とした。一階には日立風流物（ユネスコ無形文化遺産）や近世の庶民の暮らしなどの展示があり興味を引いた。

受講生は、リピーターが多かつたが、今年度の歴史講座から初めて参加した方もいた。助川海防城跡や郷土博物館は、初めて訪れた方が多いようだつた。この講座が、大子町の魅力を再発見していただく一助となればと思う。

（皆川）

編集人 斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（元 教員）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圓彦（元 教員）

皆川 敦史（大子町教育委員会）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室氣付
久慈郡大子町池田二六六九番地

雨天のため、当初の日程を変更し、助川コミュニティセンターレに移動した。助川海防城跡保全会による水戸徳川家と山野辺家との関係、水戸藩の海防策、元治甲子の乱など一時間の講義を受けた。金子日出夫会長（日立市文化協会副会長）、鈴木邦夫

〒319-3551 日立市文化協会副会長 2627